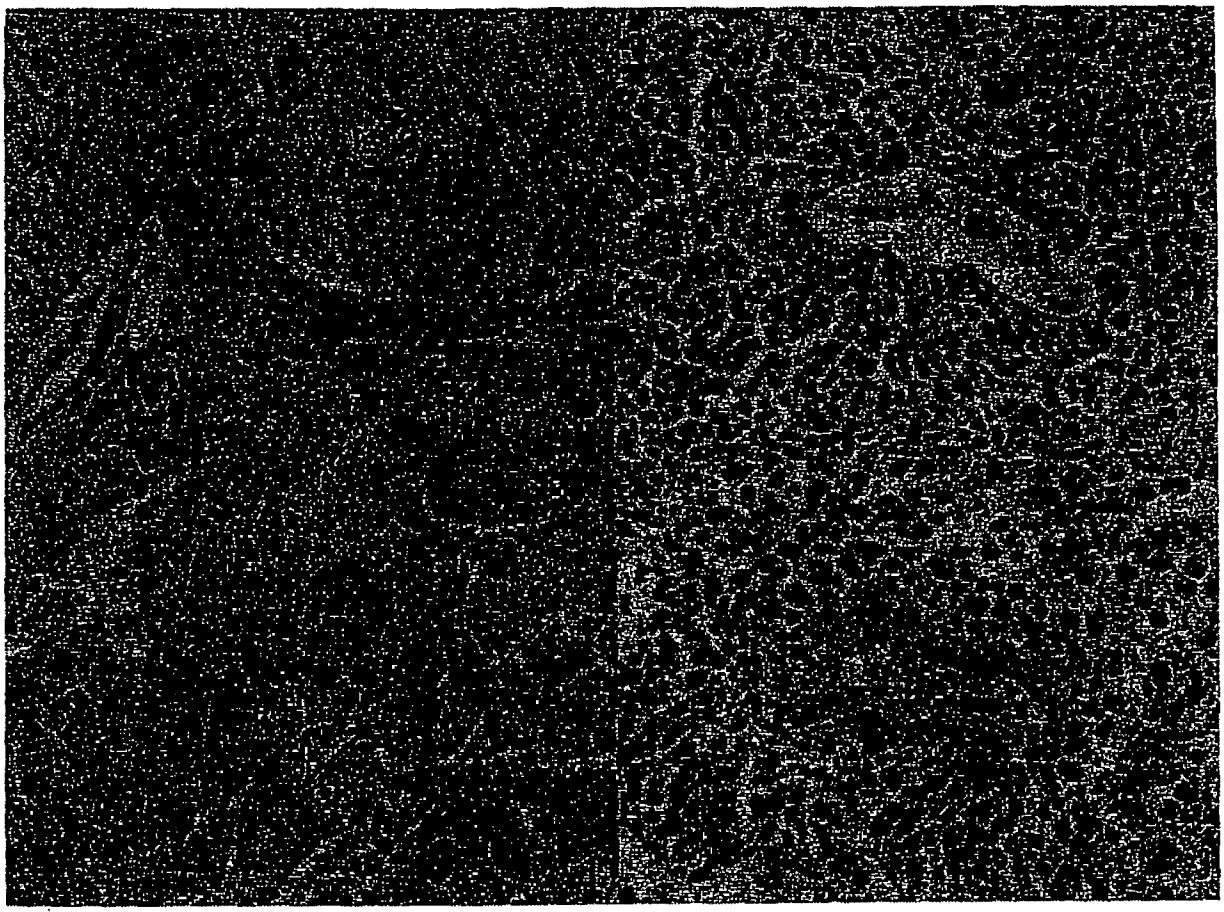
牛の陳旧な毛嚢虫皮膚炎

岩手大学家畜病理学教室出題　第13回獣医病理研修会標本 No.188



牛の毛嚢虫寄生は，必ずしも珍らしい疾病ではない。体表皮膚に小豆大から大豆大の限局性孤在性の硬い小隆起を形成し，頂部で脱毛を示すものが多い。新しい病巣では，強い力で膿汁を圧出することができる。また，これらの新鮮圧扁標本からdemodex虫体を確認することは，さして困難ではない。

こゝに提示した標本は，白血病死をとげた3才のホルスタイン雌牛であるが，たまたま，体表に前記同様の硬結を多数認めた。しかし，病巣から膿汁を圧出することは困難で，かつ，明瞭な虫体も確認出来なかった。

切片標本でみると(図1，×40)，表皮層(E)の拡張した毛嚢(F)内に出血性，漿液性，細胞性滲出物をいれ，毛嚢周辺部における肉芽組織の増殖が著明で，しばしば毛嚢内に侵入してみられる。これら滲出物あるいは肉芽組織の中に，とくに多形核白血球にとり囲まれた構造物(矢印)を散見する。これらは，クチクラ様膜様物に囲まれる管腔構造を示すものが多く，形態は多様である。大きさは10～250μ，内部にヘマトキシリンに淡染する物質をいれたり(図2，×400)，クチクラ膜の外側に棍棒体様突起をもつもの(図3，×400)，あるいは出現した異物巨細胞にとり囲まれ，貪食されるものなどさまざまである。

この形態の多様性，管腔構造，クチクラ膜，および毛嚢を中心とする分布などから，これらの異物は寄生末期における毛嚢虫体ないしその遺残物と考えられる。本病変はカビ性病変と鑑別診断上一応注意する必要があろう。また，寄生虫学的には，牛寄生種として Demodex ovis あるいは別種としてD. bovisとされているが，少なくともこの標本からみると，牛の宿主反応がきわめて旺盛であることが伺われ，これが好適な宿主であるとは考え難いように思われる。